



# 先進国と途上国の差を明確に定めていた 京都議定書体制

1990年当時とは違って、 新興途上国の著しい発展で排出量が急増 新たな体制が必要

## すべての国を対象とした新体制

一枚岩ではいかなくなった途上国グループ

中国など新興途上国 ⇔ 積極性を示すラテンアメリカ諸国 ⇔ もともと先進的な小島嶼国&アフリカ諸国



CHINA

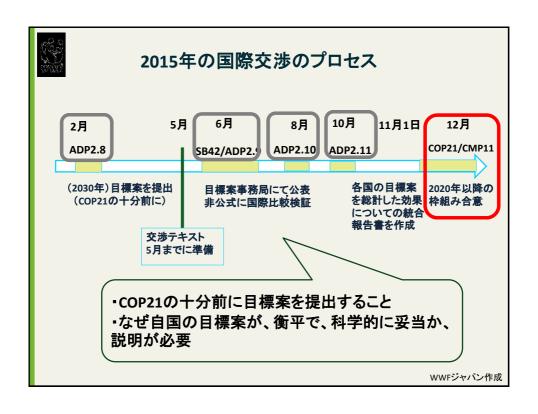
Photos: IISD www.iisd.ca/

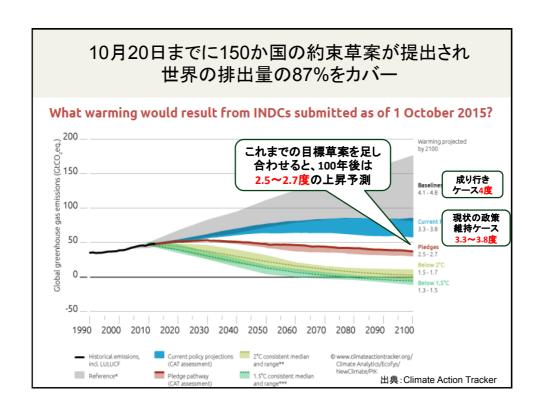
交渉は複雑化しているが、 アメリカと中国が 合意に積極姿勢! 欧州連合はもともと積極的

この3国+地域で世界の排出量の5割を超える

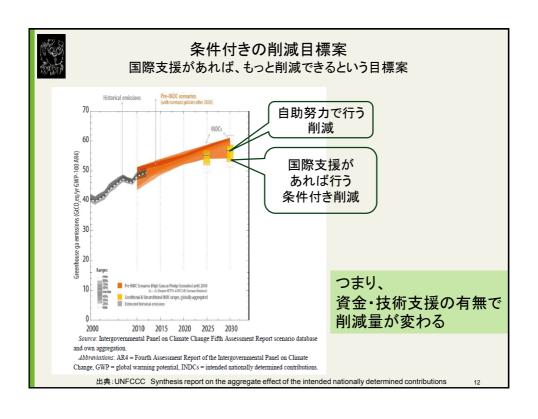


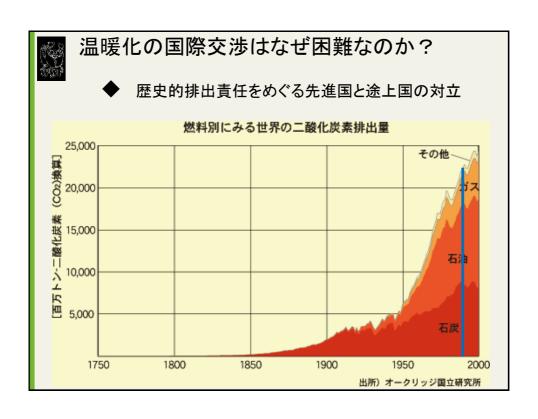


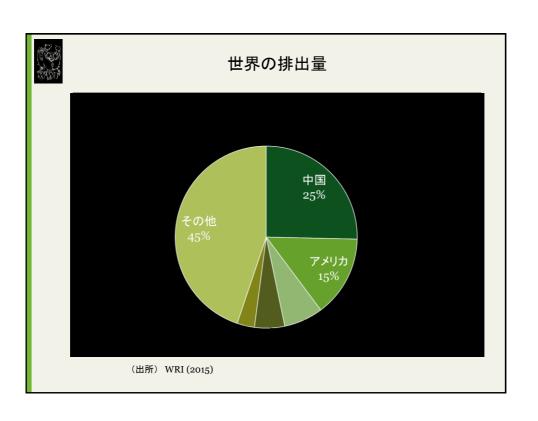


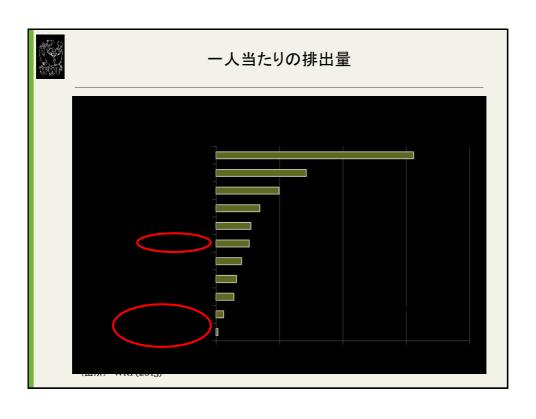


	主要国の目標草案
EU	<ul><li>2030年までに、1990年比で、GHG排出量を国内で少なくとも40%削減</li></ul>
アメリカ	-2025年までに、2005年比で、GHG排出量を26~28%削減(28%削減へ最大限努力)
日本	-2030年までに、2013年比で、GHG排出量を <mark>26%削減</mark>
中国	<ul><li>-2030年までのなるべく早くに排出を減少に転じさせる</li><li>-国内総生産(GDP)当たりCO2排出量を05年比で60~</li><li>65%削減</li></ul>
ブラジル	-2025年に <mark>2005年比で37%削減、示唆的に2030年に</mark> 2005年比で43%削減
インド	-2030年に2005年比で、GDPあたりの排出量を33~35%削減(*2020年には2005年比で、GDPあたり20~25%削減)



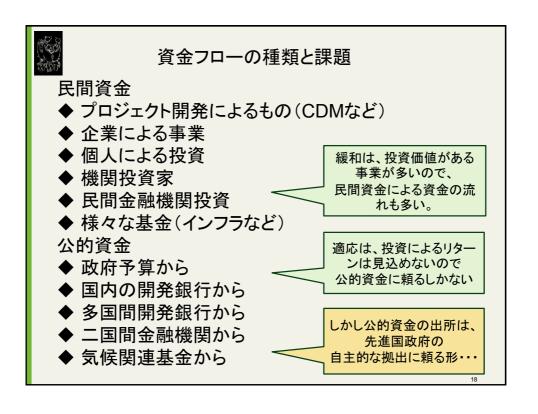


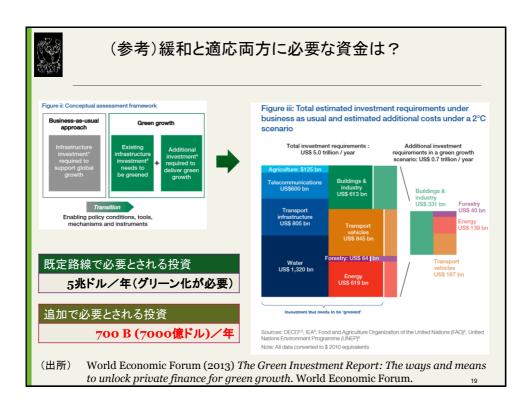






	2012年の気候資金の資 mate finance: breakdown of finance:	•	,	ation uses
	in USD billion) URCES & INTERMEDIARIES	<b>緩和</b> (USD/10億)	<b>適応</b> (USD/10億)	TOTAL
民間 資金	Project developers	102	NE	102
	Corporate actors	66	NE	66
	Households	33	NE	33
	Institutional investors	0.4	NE	0.4
	Commercial financial institutions	21	NE	21
	VC, PE, and infrastructure funds	1.2	NE	1.2
公的資金	Governments budgets	9	3	12
	National Development Banks	61	8	69
	Multilateral Development Banks	31	7	38
	Bilateral Finance Institutions	12	3	15
	Climate Funds	1.0	0.6	1.6
	TOTAL	337	22	359







## 資金援助に求められること

緩和資金にも必要な事だが、 公的資金に頼る可能性の高い適応のために特に!

- ✓ 予見可能性 今後も資金が流れ続ける見込みがあるか
- ✓ 持続可能性
- 一回限りではなく、持続して資金が流れ続ける 見込みがあるか



#### 現状の温暖化の資金メカニズムとその課題

#### **UNFCCC**

◆ 特別気候変動基金(Special Climate Change Fund:SCCF)

◆ 後発開発途上国基金(Least Developed Countries Fund:LDCF)

先進国の拠出に 頼る形 ✓ いつ拠出される かわからない・・ ✓ 足らない・・

#### 京都議定書

◆ 適応基金(Adaptation Fund: AF)

自動的に入る 仕組み 今はCDMの低迷で 機能不全

#### 2009年に設立が決まった新基金

◆ 緑の気候基金(Green Climate Fund)

初期資金は見通し がついたが、 財布の中身は これから

2



## 気候変動対策(緩和・)適応のための 資金の流れの課題

- ◆ 先進国の自主的な拠出に頼る形では、予見可能性も持続 可能性も担保できず、十分な額も確保できない
- ◆ 国の政治によって左右される二国間援助ではなく、多国間 基金への拠出が必要

## 国際連帯税の果たせる役割

- ◆ 国際的な仕組みで、ひとたび制度が出来上がると、自動的に資金が確保され、継続して資金が流れることが予見される!
- ◆ ドナー国の国内政治情勢の変化によって、資金拠出が左右されないですむ!
- ◆ ドナー国の意向によらず、途上国が主体的に取り組めるような多国間基金への拠出が可能!



## COP21のカギとなるのは、 新たな「差異化」をどう作っていくか

- 「すべての国を対象とする」国際枠組みの採択に新 しい差異化が必須
- 簡単に言えば「公平感」。開発の程度も歴史的な排 出責任も違う各国が、どうすればお互いに自国の削 減分担等が他国と比べて「公平」だと感じて合意で きるかが焦点。
- 各国ともに国益優先だけの態度では合意に達する ことはできない。
- いかに温暖化の被害に苦しむ途上国へも配慮しながら、低開発途上国が低炭素型の発展を進められるような資金や技術支援へも目配りしながら、自国の温暖化対策を強化していく姿勢を見せられるか、それが日本を含めた先進国に求められている。

23



#### COP21では何が期待されるの?

- ✓ パリ合意"2度未満達成シナリオ"はほとんど不可能であろう
- ✓ しかし、パリ合意は"2度未満達成シナリオの通過点"と位置づけ、その後に削減量を増加させていく"サイクル"が、合意されれば次善の策ではないか?
- ✓ 今までのように、京都議定書、コペンハーゲン合意、カンクン合意、など紆余曲折の国際交渉を経て、その都度制度の存続をかけた交渉を繰り広げられることは避けたい
- ✓ そのためには、パリ合意が、長く続く制度が構築される一歩という位置づけになることが重要。
- ✓ 約束期間を5年などに決めて自動的にサイクルを回す形とする
- ✓ 次の目標を決めるサイクルになれば、その目標は前の約束期間を上回っていくことなどが決まれば、削減目標が上昇していく構造になる



# COP21の成功をはかる5ポイント! **詳細なルールにカギがある!**

#### 目標改善サイクルのある永続的な仕組みに合意できれば!

- 1. 2050年80%削減、脱炭素を目指すなど長期的な目標がある(長期目標)
- 2. 5年ごとなどの約束期間で目標を出すこと(サイクルを持つ永続性)
- 3. 次期目標は必ず前の目標を上回ること(目標改善)
- 4. 各国の目標の積算した全体目標が、科学的に2度未満達成かを検証すること(科学的整合性)
- 5. 測定・報告・検証制度など、各国が目標をちゃんと達成しているかを見る仕組みがある(遵守確保)

25



COP21は、今後の低炭素社会のルールを作る場!

ぜひCOP21パリ会議からのメッセージに 注目してください!

パリ会議 2015年11月30日~12月11日まで



# WWFジャパン https://www.wwf.or.jp/



「地球温暖化の目撃者」 小西雅子・編著 毎日新聞社



「地球温暖化の最前線」 小西雅子著 岩波ジュニア新書